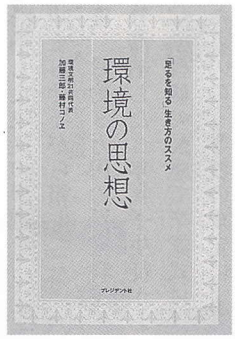
“そんぼう”さんのエココラム

# 地球環境を考えた足元からの行動 3

■日本の伝統社会に見る持続性の知恵

山村 尊房（日本水フォーラム参与）




書き出しから私事にわたって恐縮ではあるが、昨年秋の事業仕分けの結果（担当事業が廃止）を踏まえた善後策の一環として、3月末で財団法人日本環境協会を退職した。今年の干支の庚寅（かのえとら）の「庚」は更まるを意味し、草木の成長が行き詰まって新たな形に変化しようとしている状態を言うとのことだが、庚寅の年男の私にとって、今年はまさに干支の意味通りの変化の年となった。そのような訳で、このところもっぱら充電の日々を過ごしている。今回は、そうした中で読むことのできた書物の一つをご紹介したい。

今年の1月に加藤三郎、藤村コノエ両氏により上梓された『環境の思想』（プレジデント社刊）＝**写真**＝は、両氏が共同代表を務めるNPO法人「環境文明21」による長年の研究の成果をまとめた書である。「『日本の伝統社会が継承してきた知恵を発掘し、その知恵を、日本はもとより世界で持続可能な社会づくりに役立てたい』との思いを1993年の法人設立以来抱き続けてきた」と著者らは語る。17年に及ぶNPO活動の中で、「日本人は限られた国土のなかで、限られた資源をうまく活用しながら一つの社会を維持し、優れた文化や歴史を築いてきた。そうした日本人には、特有の価値観、DNAのようなものがあり、それが現在の閉塞から抜け出し、有限な地球環境のなかで生き抜く持続性の知恵につながるのではないか」との思いが強まっていったという。

著者らは、海外からの日本の技術に対する熱い視線と、その背後にある思想に対する（外国人の）無関心のギャップを指摘する。そして、「もったいない」「足るを知る」といった日本人が長年にわたりはぐくみ、継承してきた知恵の働きについて、日本人の間でも、まして外国人に対しても、理解できるような形で伝える努力がされてこなかったことに思い至る。

本書のタイトルを『環境の思想』とした理由として、「21世紀の人類社会はさまざまな問題を抱えてはいるが、そのなかで最も顕著な脅威は人の暮らしと生命の基盤である環境の破壊である。だからこそ、その破壊を最小限に抑え込むだけでなく、そのピンチをチャンスに変えてしまうたくましい思想が今、求められている」と述べている。

本書は、持続性に関する日本の伝統的知恵として、「①モノより心、②自然との共生、③足るを知る、④循環思想、⑤調和を保つ、⑥精神の自由、⑦先人を大切にする、⑧次世代を愛し育てる」の8項目を提起している。

日本の自然や暮らし、そして、そこにはぐくまれた神道の思想、さらに中国から伝わった仏教や儒教が融合して形成され、日本人の骨肉となり、生活感情の中核になったものと述べるこれら8項目の内容検証の記述は、香り高い日本文化論ともなっている。

そして著者らは、欧米起源の技術や政治経済のシステムと日本の伝統社会の価値システムとのハイブリッド的融合の重要性を説く。17年前に環境庁地球環境部長からNGOに転身した加藤三郎氏が貫いた「環境と文明」への志は、藤村コノエ氏らとともに、遂に時代が求める「環境の思想」への到達を見た。